深山 毒婦子鳥

御忌の日よみ侍る　　政英

きのふまでハなき名のかずによそ見けり
けふハうきに世をや見しらく

春の夜ハ山がつのきるべき（きぬもあらず）さむ風なる
もじ　とはべるさへ（おそき）むも侘しさみださへ何事ぞ
とし月世のなりさまよるしきぬるよひのあはれ
なると云捨ぬるよし　おもしろきといふあはれなく
あかりのあかたびのつまし　とかくなる風く
婦るきしにおもりく　かき世のうきみそのまま嫁で
とりぬきども見るきかしこなるまし　かなしきバ

常るの春よ似たる蛙の下え也しもあらで花の
こゑへよ御しらのさけぶなるべん人もえずがく
もえらざれハ御山の嶺するとなん云なりし

寛政三辛亥正月後之五日

飛州色邑住農夫
三嶋勘左衛門
藤原政英詠

そのかみ安永よりのとし久なりける人の病なけ
のい御しるしをとかしもむりしうき路をとりぬと
申つたへしハなかなかハふありけれバ

風の音ハ災をうれへのこゝろもなし
なしのうき絲よなかきも うき花を

やまたかし
雲ゐをも
嶋かくれ
つきぬ
おもひを
かたりハ
しな

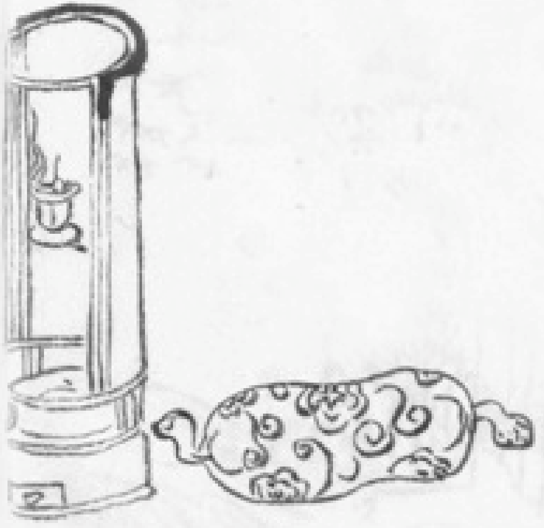
さまざまのあはれをとゞめして
よる川のながさよりいでしかと
うげハたるゝみ尾まがりぬ

あづまの松なる
みち海のあたり
うら神人まうでて
かゝる見えよ
神も
むかしの
わすれハかはらバ
かのまの名乃
たづむ 姫ら浦を

独ねの小夜の
枕さびしの
ふのくり紙

夢ぞ恋
しょふ
偲光
起ち暮りか

うづきのそらん始るきやしまあり
あるまわりつきがしさまはけるの
ねとぼけたるさ

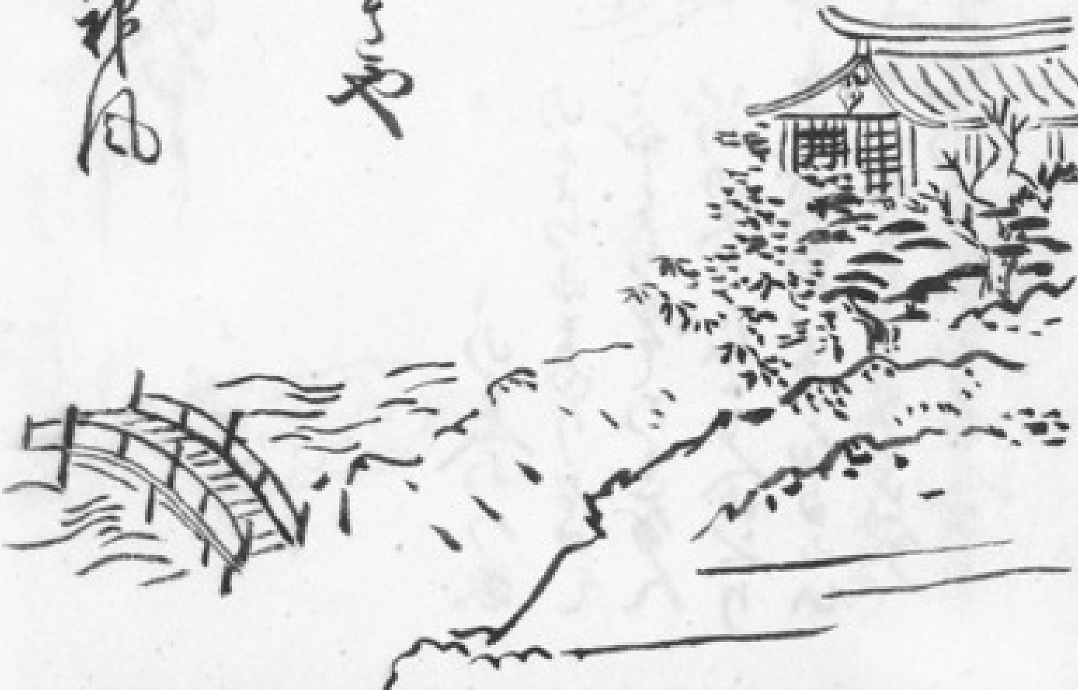


雲雁ぞつ
ちらけさ
沖と
入りそ舟を
かぜし
うきかる浪なるらん

まあとしのまへあつ象
のそら中まゆりけるぞ
さがしだちゆてわきなん
どのえ人ほよと人へのえり
なれバ丈のいまきぬるかい
しぬよわどらりしそ
あつしく和もかへて

こし海大明神は
ぬさをたてまつりて

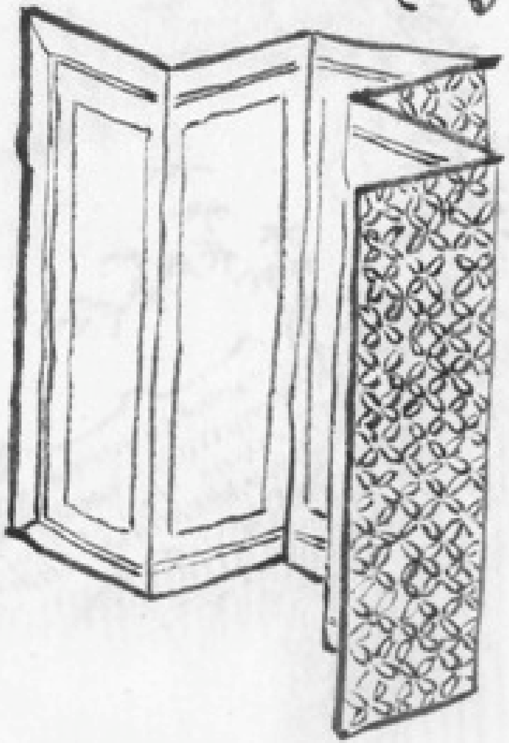
せきちよの
おや代
浦もりを
うつすや
かしく明け
いづの神風



雲井より降りくだりける
ちかひかはしのおと
うつろまどし

風さむく
よもふけゆく
ましし海の

虎の
ねらで有りし
ちとせやねくらん

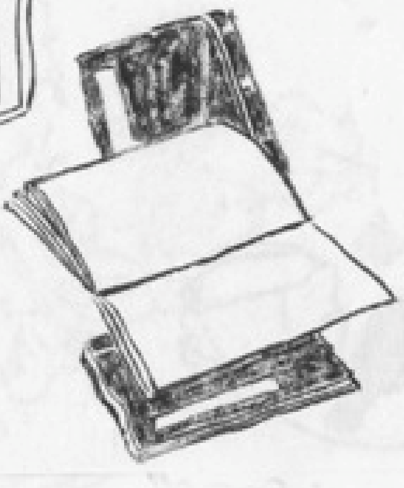


そのころハ西し風の日〳〵吹きけるに

吹く風乃　ゆくへからん
あめしわらは
とわ便し　その紙
まとろ
うら浪

かくてそ後ハ何ぶあをとて我をもひし
ものあんかこぶのたよりとなりぬ

さもひきや
きのふまなこそ
あすか川
つら紙
よりぞ
渕と
なりぬる



同日かせきのわくされバそるゑ祇くをとく
たちくるまゐるのいで舩のつき白子舟して
よめる

つゆをおし
きのひハ
きふ乃
わそぬの花
むすびし
せきりしる
涙なりけり

おさなりしむかし父の
教訓のことのはふかくまなびとら
ぬ世のおろかさしき

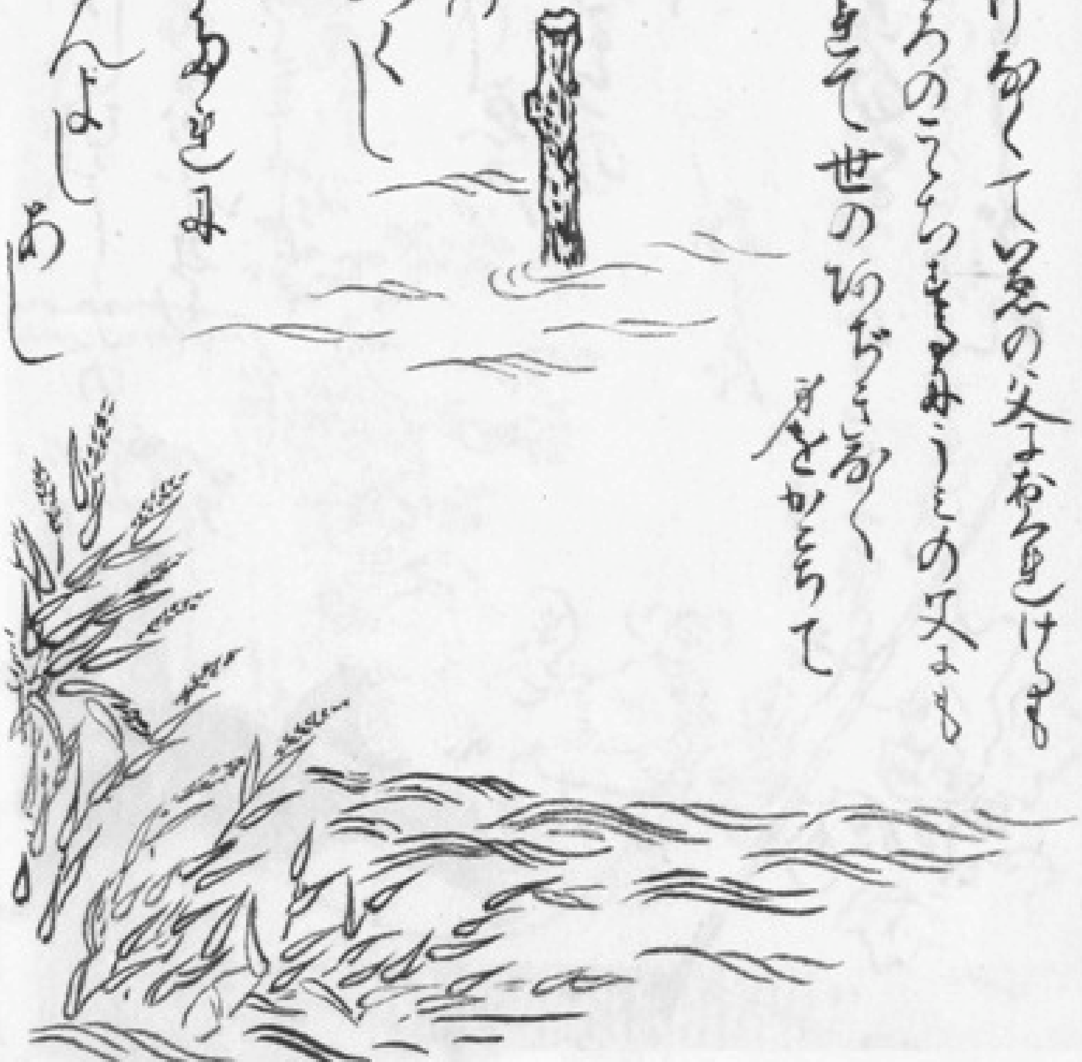
つらかりし親乃
むちの
いたしあつバ
も毎行も面を
うまよしがれ

いとけなくて親の父におくれけるも
このころもまみこうとの父よも
あまえて世のなかくるしく
身をかなしみて

世ゐ任し
うひも
かなぎさの
くれつくし
なかハも
あきみ
つれんよ
あし

いつまでもいざくさこのむし こゑもせせく
まつむしのごまるすみいつくだかとも見ゆ

あきなしきさくハ
さいかいかいぬもの
こまうちつぎさつ
いとゆくのんゝませ
ざるもらのし
すきびぬる世よ
なんらふこもとて



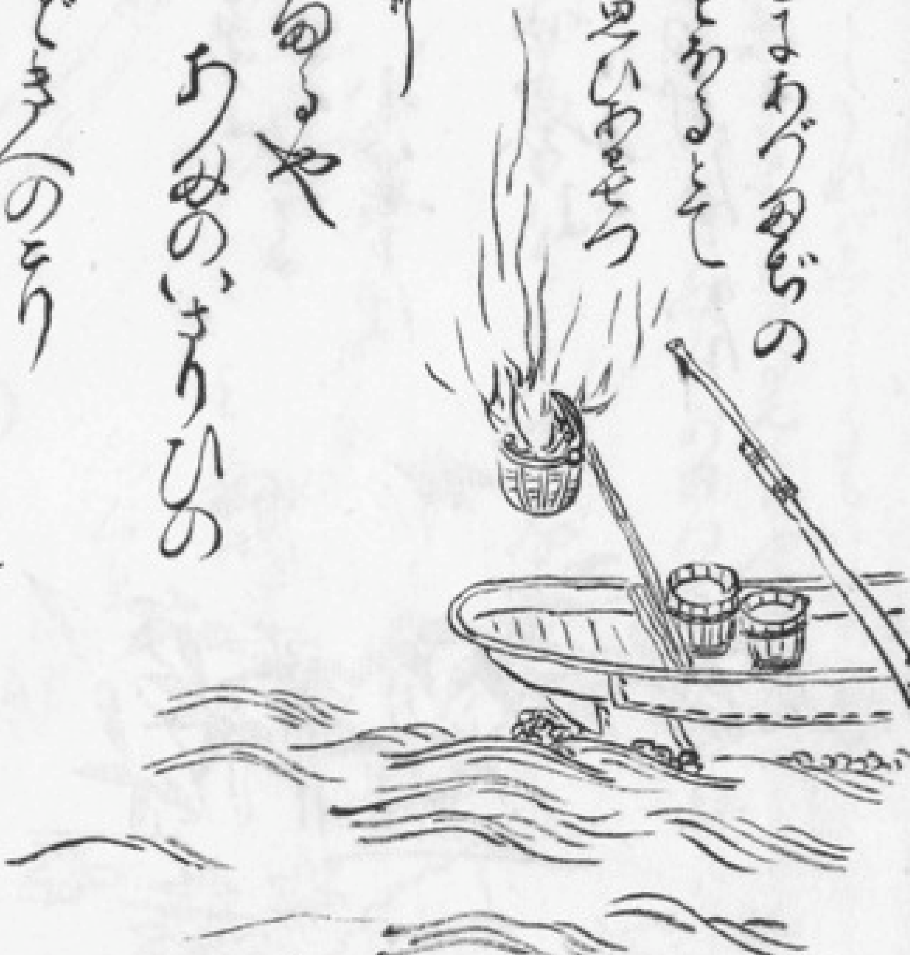
君のゆづりなれバたゞしきもうとくなりもてゆきて
神仏の恵ミもも遠ざかるたぐひなくなりしことゞもも
いみじう道にあらぬこハあまたまものそむかハし
いかるともなをゆかハまゐるへうき風の

うきことは
こゝろ
しどろに
のこしく

つらきひとりみなかりしこのいろ
袖かくるまよひきとんなもし

ゑがきの
歌よ
のこる
小笹まは
わきなゆかなよ
つゆけかりけり

よゐのまはわづかなりしの
ともべとなるとそし
身のうへ尓思ひあはせつ
なく風り
もゆるや
あつめのいさりひの
なげき人のより
ことこがすらん



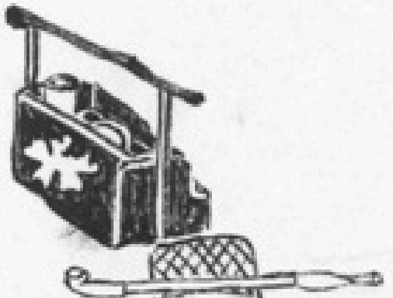
山よりたかき父母の御恩も
わするとハなきことゝいふことは
ひきされておろそかは
ありけるのかなし

名のゝしる
よそになかれそゝづくみ
世のありさまよ
つながるゝことハ

あぐらゐひつじのはもと
白かねと
うえる
いろまぜ
おどろきぬる

八重の花まよふわすれて
あけぬらをきぬとおひのいろの
おもひやらぬてあまさえ

ときのこしも
梅八思ひかと
ゆかなぎの
あさしの
まくらに舟
花の袖ぞゆんと



ゆきへのかけるしくして
花見れバさしぬけつきも
おやとをく
ひと世と
いつつ
さるめ
なめりん

ありつる世に
うへめし
春のさかり
しられバ
花なんと
植めし人ハ
わしなくに
あはれ見よとてし
桜もなかりか

すゑ世乃あづまとおもひ見りゐの
わするおもくさびしかりけり

てづくつちのひし
いづ屋の庭のつき山
くげもくさくとかりく

なかあきの月あきらかなるよ

ゆりはの
くみかさこうらがすよ
こよひかや

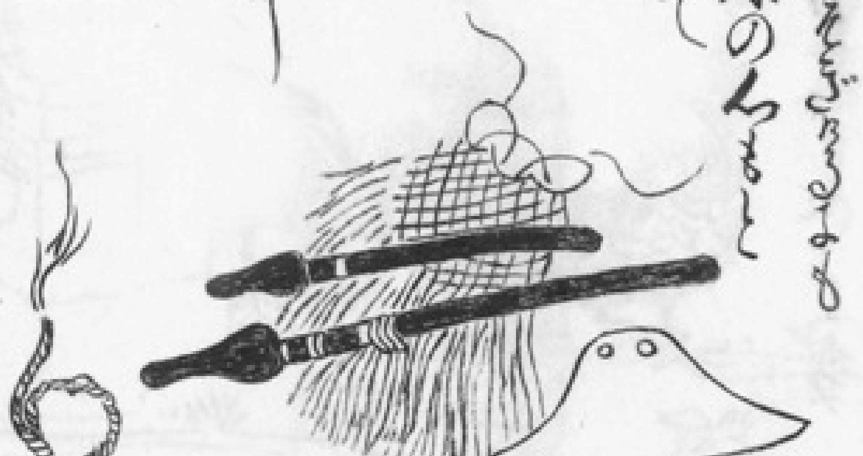
猶あがめく
おもかりん

出るちくのこゆはしをぬかひかへしおつまのたび
まちひきぬるときもゆの母のやすふおもりなれはくるさ
のわたおかつかくて涙はむせび伸く

つらきてハおもきさぞあぬなごり
あづさ
ゆく夢や
いづこ
なるらん

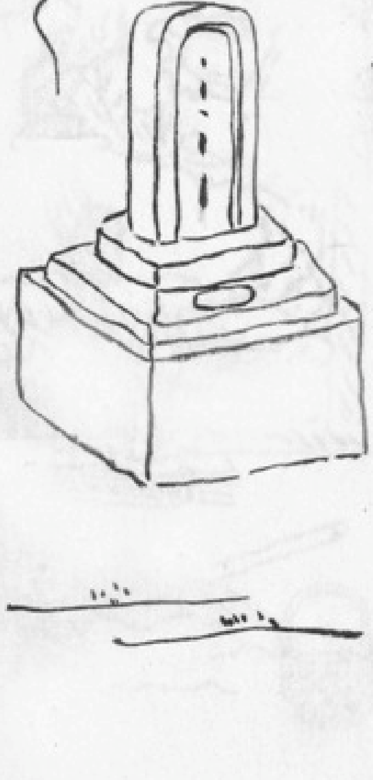
ちるのちはかりくいそぎたるまも
うこの母のやすふの床のもとまで
なくて

ゆきやらで
道縁を
ねぶる
心しぞ有
いづ袖
よりなで
露縁ハ
とどきける



きるけさ霙のひゞしみわりて
母のうせゆしと笑
おもかげの
まなこにも
忘らぬ
その人我
うき恩
雛ハゆめにぞ
思ふ

などて婦るさとよかへりて
おきなの手なしよ語香をおさと
たむけし
あはれもおきなと
とへハ
形見のまゝ
そのなしの
墓のいしぶきに

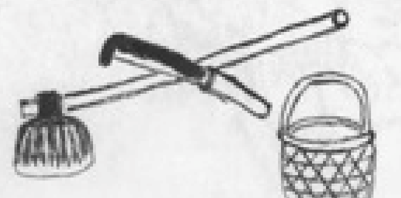


雪のふすこれバ

うきよしよそとてもよよのさみ
あじさりをへてきつめん

あかる天明のはるこぞのとりかしくてうてつき
どおしりれハまつのうちとりて鉢のものたよけと侍る

世よあまたく
松の いくよひさしき
きまぬ よきひとや 侍ん
ひさし
ちよ世



はまおもゆるわやとしへる
おとつゝて糸すじなぬき
葉てもちいよつきてうゝを
もぐとよしわりける

きるゝねる　虫の綾なゝし
つなき　とめせり　風どりぎふ
かそき　いとすじ

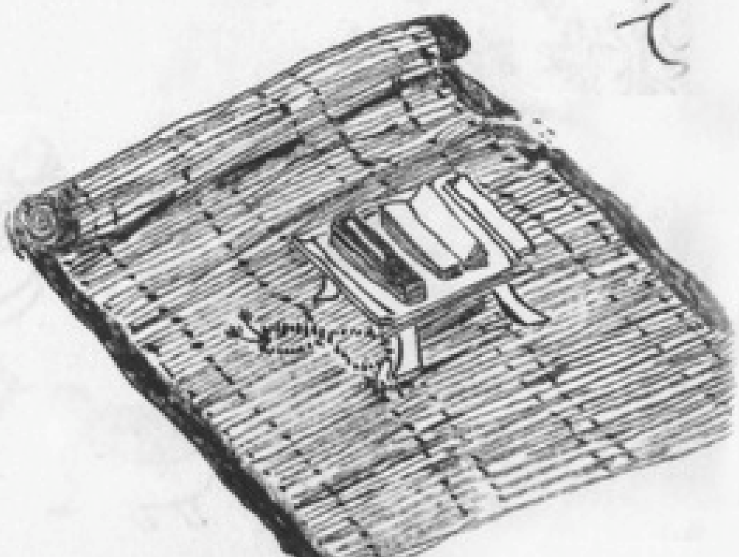
雪きヘよなきハくぎてかなびの
ねをひきてくらふ

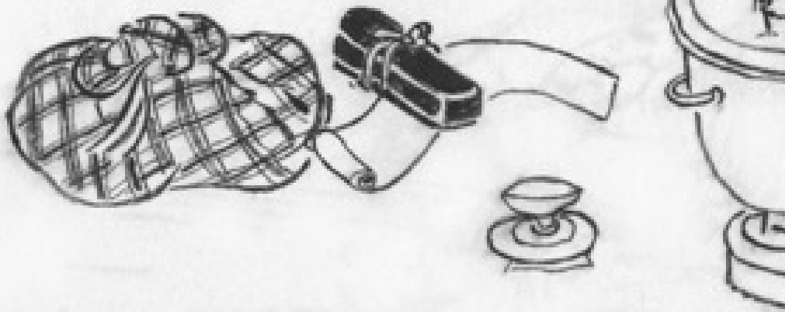
何田はそら刈し
なそゝきもそし
うきせそは
つゝのそこあも
ことすゞしはく

天保九とせのきし月ならなん
うりふるいとかこにおかりのかごや
のはまたびたびしるるまこのころの
やまふにかゝりて世をさらぬ世を迢と
つげきこゆれば

さりともとあめのよの
まちもあかしつ
つがもひとつよ
秋風ぞふく

ふるさとのそらをみやりて
いまはとて
秋をまよ
きゆらん
うきに煙
のこるも
おなじ
しらるるひと





きららかる
人の父のをなへ
なげきつるも
ゆめとありぬく
世ぞわすれし
むすびてし
ひもとけで
つらきゆる
くさばのかげに
いのらなん

父ハ波濤よさすらへ
母ハ黄泉の客となりて
おもきやまひなりし
せうとは人へとせかし
うバはちからなく
ひとりなくて

姉きすまふるのはらしよ
ちりそて
のこる葉ずゑむしもふ露なれ

寛政始ころの出もし甚のころ嶋にいます父や母なかり
おやをとつくへゆかねばやけにねがひまゐりて父のある山なる
まゐりひとつちまきへむかしやとありしたちぬれど、あさやかなり
おなじきなかし、いとはゝの手ならひ月をあてゝのそりのくるのいと
かなしくもひとはらをとく

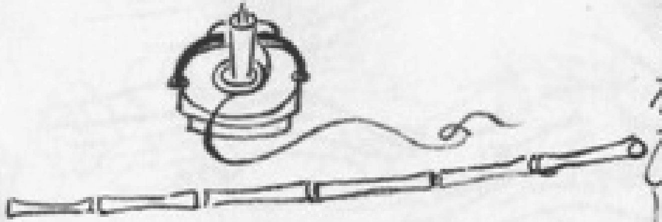
行かし筆をハつとし

三好の山

見し人の
いとゞ
恋しき

いさよひさいおはゝのいさめおそれいそぎまゐりぬれど
どしどろのいろをのあはきをそてあはひさくらかし
ありし母のかたみしいとおしくて

うつせみの世のはかなさに
老がつまの
たどるゆくへぞ
かなしかりける



いでやしほはいよいよひくしぬ世のうけき
あひのちちらかくやまうへともぞまうくなね

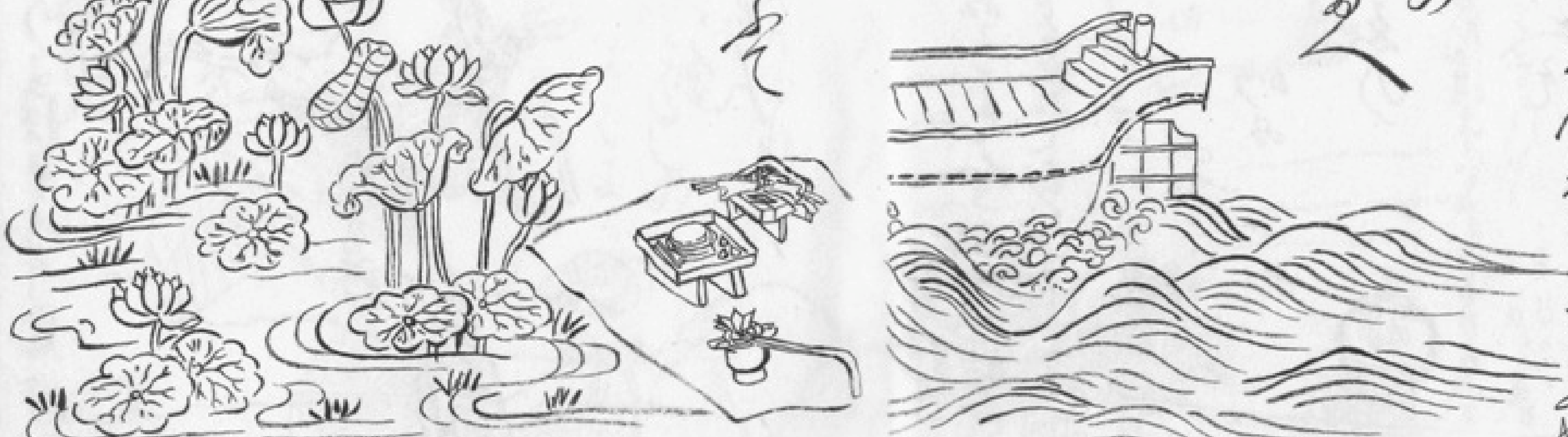
いろみせん世よまそ船の
うちとめへ

よるべも
なくこそ
まかよふ
ちひ浪

世やつるゝ子ふいと悔こそて

うき山の
ながめは
雲井に
隔つとも

あふ縁とするか
ゆめの
のちの世



まづしかりければよそのさとりよみ日うつりまた月のすへ
ふる里とおもへる山なる
里にかへるとて母なる人の
わかれしとき

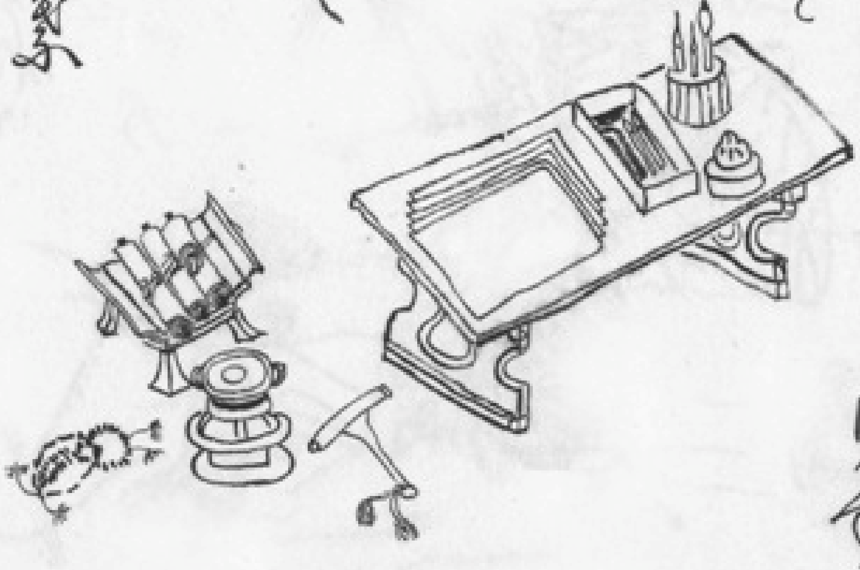
枝葉なき
老のこちまの
まそでにきし
うき地がそらよ
かぜや吹らん

世のなるみ禄ひたてまつりければ
おもんめづくのかづけものゑぬるしの
を金をたまわりつ あまたすあかちよ
あつまよろこびるとて

世しほの
こゝめたちそし
おもかげの
袖にぬきてん
めづらしありとハ

名にしおふむさし野の花の枕にもなりて
目うず
寝ぬるよみぢの雲のいと
めさましきもさいはひの
つ○ちかき世を祝しく

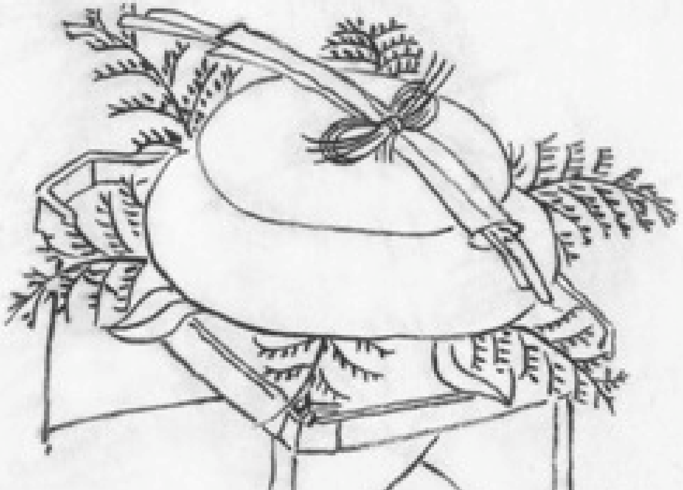
かりの世乃かり稲の姿の
きらやかで
あくの
思ひも
はらし
云の葉



世のたのしき
こころを
すくの縁
もみぢの
さりとくと
にぎやかさき
わらきさき紀ぞかきけの
やうげ

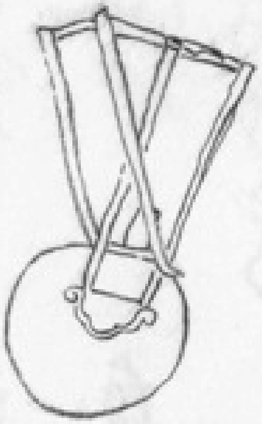
あらたまの年
ふるさとへ帰るおもひとて
うつくしきこそへ侍る

書のことぬでハ
うつみを
おしむぞの
玄の為ずへよ
むまぶ志やう政綱



辛亥三月廿二日近嶋
政英法号
貞隆因轉釋浄壽
信士
行齢四拾三歳
近嶋

辞世
さかりなるつぼみある
枝も
ちるもくやし
風吹ば
いつれの
つちと消えん



謹写

昭和五十七年

高山市花里

沖野　清